hp invent

ルネサスが
双葉

広告 特集「変化の時代の企業経営、変化に即応できるIT戦略」提供：日立製作所
広告 ビジネスを成功へとつなげるカラープリンタ。キャンペーン実施中！ ーNEC
広告 【マルコメ】月次決算処理が30日→5日に！運用コストも20%削減 富士通
広告 特集：ハイビジョン並み映像で円滑な会議を TV会議システム/日立ハイテク

こどもどこでもものがたり（中村伊知哉）

エッフェル塔と信号機とキノコ

均整のとれたベージュ色の町並み。パリを一望するならポンピドーセンターの最上階に限る。エッフェル塔やモンパルナス・タワーは背が高すぎて、展望台は眼下が遠すぎる。程良く見渡すには、目線の低さが要る。エッフェルは偉いがエッフェル塔は高すぎる。モンパルナス・タワーは醜悪だ。登るとモンパルナス・タワーが見えなくなるからみなモンパルナス・タワーに登るのだ。

そんなどうでもいいことを論じながら、子牛の頭やらウサギのパテやらを食らう。ビストロでもカフェでも、パリジャンやパリジェンヌは、飲んだり食ったりしながら、人生を賭けた形相で、速射砲のようにプープーしゃべり続ける。だがたいていは、そんなどうでもいいことを論じている。文化というやつだ。

信号機が故障している。交差点では、ダンゴ状態になったクルマどもが、プープー間抜けなクラクションを鳴らしながら、なんとか互いをすり抜けて通行している。慣れっこなのだ。文化というやつだ。

市場をねり歩く。キノコ屋がいる。フォアグラ屋がいる。チーズ屋がいる。エスカルゴ屋がいる。キノコだけを売っている店。フォアグラだけを売っている店。チーズだけ、エスカルゴだけ。やたら分業である。母方の実家のある西陣で着物をしつらえた際、着物屋やら羽織屋やら帯屋やら下駄屋やら、旦那衆は、こうやって分業しながら500年食ってきたと教えてくれた。それも文化か。パリと京都は姉妹都市である。

犬と大人と子ども

こら犬。あっちいけ。キャイン。パリのひとはそんなことはしません。三つ星レストランにも淑女は犬を連れてくる。犬は大人しくしている。だが子どもはレストラン禁止。大人と子どもの居場所は画然と分けられている。フランスは大人と犬の国である。日本は逆だ。こら犬。あっちいけ。だけど子どもはどこでも大いばり。日本は子ども天国である。

フランスは日本のマンガが最も浸透した外国だ。FNACのマンガコーナーには本場・日本マンガのフランス語版がずらりとならんでいて、OTAKUたちが真剣に立ち読みしている。マンガやアニメやゲームは、欧米では子ども文化だったのだが、日本では大人も子どもも入り交じってジャンルを育ててきた。だから大人向けのマンガもアニメもある。厚いユーザ層が育んだ広い作品群がパリの

大人をとらえている。

パリの公園では、年金生活者や失業者が銀色の玉をころがして遊んでいる。ペタンクである。オヤジどもの遊び場を子どもが横切ろうものなら、こらガキ。あっちいけ。プープー叱られる。日本ではビー玉で遊んでいる失業者を見かけることは少ない。

ケータイと写真とマンガ

パリには、子どものワークショップを開くために来た。日仏40人の小中学生がケータイを使って4コマ写真マンガを作ろうというものだ。「こどもどこでもものがたり」と名付け、NTTドコモ主催、NPO法人CANVAS共催で実施した。（http://www.k-dcm.net/J/index.html）

街や人の写真をケータイで撮って4コマのストーリーをたくさん作る。東京の子どもたちが作った作品をパリに送る。パリの子は、その写真だけをみて別のストーリーを作ったり、ストーリーに合った写真を撮ったりする。自分たちの作品も作る。それをみて東京の子は同じ作業をする。

東京でもパリでも、はじめて遊ぶケータイに夢中になる。普通のカメラに比べ、接写が多いのはインタフェースの違いによるものだろうか。町へ出て、グイグイとケータイを押しつけて写真を撮りまくる。放っておくと、着信メロディやテレビ電話機能を見つけて遊び始める。機械の説明は不要だ。

ストーリーには差が出る。パリっ子は、かわいい童話を描いたり、素直でまとまりのある風景描写をしたりする。東京の連中は、起承転結にメリハリをつけようとしたり、ギャグに走ったりする。芸術の国とマンガの国の違いだろうか。

日本が圧倒的に先行するケータイと、長く育んできたマンガ表現とを組み合わせる。ニッポンの技術や表現を使って、新しい国際コミュニケーションを拓く。今回は第一弾の取り組みで、より活動を広げていくようユネスコからも期待されている。

さて、次はどこでやりましょうか。

このコラムは日経デジタルコアによって企画・編集されています。
ご意見・問い合わせは同事務局あてにお願いします。

-筆者紹介-

中村　伊知哉(なかむら　いちや)
スタンフォード日本センター研究所長

略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド"少年ナイフ"のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメデ

ィアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、（社）音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット,自由を我等に』（アスキー出版局）、『デジタルのおもちゃ箱』（NTT出版）など。

● 記事一覧

- 「Web 2.0」はバズワードか？（湯川　抗）
- 本当にユビキタスな情報社会へ向けて（土屋大洋）
- 個人情報保護法と暗号(内田勝也)
- 到来した「超」カスタマー・セントリックな時代(江川　央)
- 「NHK民営化」を議論する前に（築地達郎）
- 牽引車は「創造大国の構築」ではないか――「IT新改革戦略」に欠けた視点（坪田　知己）
- 「ローカルサーチ」が生み出すマイクロビジネスの可能性――地域情報化のあらたなるアプローチ（藤元　健太郎）
- 日本のコンテンツ政策に明確な政策目標を（金　正勲）
- コンタクトセンターを企業の中心に据える(唐澤　豊)
- 「インターネットガバナンス問題――ICANN問題を超えて、次の段階へ」（加藤　幹之）
- ゲーム機へのハッキング急増に備えよ（帆場英次）
- 子どもといっしょに考えたい、安心・安全インターネット（尾花　紀子）
- セキュリティー問題、政府レベルでも協調へ――「情報社会に関する日独シンポジウム」から（関　啓一郎）
- ネットワークは中立的か？――動き出した米国の議論（谷脇　康彦）
- 公的個人認証システムを民間企業に開放しよう（前川　徹）
- 「e文書法」施行、その効果と課題（高木　寛）
- ユビキタスな法律サービスへの期待（今川　拓郎）
- 「スローなユビキタスライフ」が目指すもの――人生を支えるユビキタスへ（関根　千佳）
- 求められる「ユビキタス・ライフデザイン」（碓井　聡子）
- 「ギークが変える技術フロンティア」（土屋　大洋）

ヤマトシステム開発
物流と決済をITで支援

NIKKEI NET

新製品

- パソコン関連
- ソフト&サービス
- 自動車
- AV&通信
- 生活
- ホビー&レジャー

(C) 2006 Nihon Keizai Shimbun, Inc. All rights reserved.